２０１７年度横浜ナザレン教会三位一体主日

「霊より生まれる者」

ヨハネ福音書２：２３～３：１５

民数記２１：４～９

【聖書箇所】ヨハネ福音書 2:23～3:15

23 イエスは過越祭の間エルサレムにおられたが、そのなさったしるし
を見て、多くの人がイエスの名を信じた。 24 しかし、イエス御自
身は彼らを信用されなかった。それは、すべての人のことを知っておられ、 25 人間についてだれからも証ししてもらう必要がなかったからである。イエスは、何が人間の心の中にあるかをよく知っておられたのである。 1 さて、ファリサイ派に属する、ニコデモという人がいた。ユダヤ人たちの議員であった。 2 ある夜、イエスのもとに来て言った。「ラビ、わたしどもは、あなたが神のもとから来られた教師であることを知っています。神が共におられるのでなければ、あなたのなさるようなしるしを、だれも行うことはできないからです。」3 イエスは答えて言われた。「はっきり言っておく。人は、新たに生まれなければ、神の国を見ることはできない。」 4 ニコデモは言った。「年をとった者が、どうして生まれることができましょう。もう一度母親の胎内に入って生まれることができるでしょうか。」 5 イエスはお答えになった。「はっきり言っておく。だれでも水と霊とによって生まれなければ、神の国に入ることはできない。 6 肉から生まれたものは肉である。霊から生まれたものは霊である。 7『あなたがたは新たに生まれねばならない』とあなたに言ったことに、驚いてはならない。 8 風は思いのままに吹く。あなたはその音を聞いても、それがどこから来て、どこへ行くかを知らない。霊から生まれた者も皆そのとおりである。」 9 するとニコデモは、「どうして、そんなことがありえましょうか」と言った。10 イエスは答えて言われた。「あなたはイスラエルの教師でありながら、こんなことが分からないのか。 11 はっきり言っておく。わたしたちは知っていることを語り、

見たことを証ししているのに、あなたがたはわたしたちの証しを受け入れない。 12 わたしが地上のことを話しても信じないとすれば、天上のことを話したところで、どうして信じるだろう。 13 天から降って来た者、すなわち人の子のほかには、天に上った者はだれもいない。 14 そして、モーセが荒れ野で蛇を上げたように、人の子も上げられねばならない。 15 それは、信じる者が皆、人の子によって永遠の命を得るためである。

民数記２１：４～９

4 彼らはホル山を旅立ち、エドムの領土を迂回し、葦の海の道を通って行った。しかし、民は途中で耐えきれなくなって、5 神とモーセに逆らって言った。「なぜ、我々をエジプトから導き上ったのですか。荒れ野で死なせるためですか。パンも水もなく、こんな粗末な食物では、気力もうせてしまいます。」 6 主は炎の蛇を民に向かって送られた。蛇は民をかみ、イスラエルの民の中から多くの死者が出た。 7 民はモーセのもとに来て言った。「わたしたちは主とあなたを非難して、罪を犯しました。主に祈って、わたしたちから蛇を取り除いてください。」モーセは民のために主に祈った。 8 主はモーセに言われた。「あなたは炎の蛇を造り、旗竿の先に掲げよ。蛇にかまれた者がそれを見上げれば、命を得る。」 9 モーセは青銅で一つの蛇を造り、旗竿の先に掲げた。蛇が人をかんでも、その人が青銅の蛇を仰ぐと、命を得た。

1　霊より生まれるとは

先週、私たちは聖霊降臨祭礼拝を捧げ、聖霊降臨は新しい人間の創造である・・と使徒言行録２章から聴いてまいりました。今日は、聖霊によって新しく創造された者とは一体どのような者かをヨハネの福音書から聴いていきたいと思います。

福音書記者ヨハネは巧妙に描いています。「まだ聖霊によって新しくされていない人」を登場させ、彼と主イエスとの対話を通して、「聖霊によって新しくされた者」を描いています。まだ聖霊によって生まれ変わっていない者―それがニコデモなのです。

2　奇蹟を見て信じる者

発端はニコデモの登場する前にさかのぼります。主イエスは過越祭の間中、エルサレムに滞在され、数々のしるしをなさいました。2:23 節。“しるし”とは、主イエスが神の子であることを示すような不思議な業―奇蹟のことです。主イエスが奇蹟をなさるのを見て、多くの人が主イエスを信じました。

しかし、主ご自身は彼らを信用されなかった・・とあります。これは、私たちにとっても、とても厳しい表現です。病を癒す、困難を解決するなど神の目覚しい御業を見て感動し主イエスを信じる・・という面が多かれ少なかれ私たちにもあるのではないでしょうか。しかし、主はそれだけでは、聖霊によって生まれ変わった・・とは言えないとおっしゃるのです。

3　ファリサイ派、ユダヤ人の指導者

さて、奇蹟を見て信じた人々の中にニコデモもいました。この人はファリサイ派に属する人、ユダヤ人たちの議員だとあります。『ファリサイ派』の『ファリサイ』というのは、「分離する」という意味です。６００以上に及ぶ細々とした律法を必死に守ろうとする人たち。守れない者たちをはっきりと区別し、一切交際しようとしませんでした。神に選ばれた民としてしっかりと生活しようとした人々。彼らはこの世の富ではなく、律法を守り神に誠実な生活を大切にした人々。ファリサイ派を、“真面目派”と呼んだ人もいます。

また、ニコデモはまたユダヤ人の議員でありました。ユダヤ人の指導者、有力者です。人望も篤かったと思われます。

4　夜やってくる者

真面目な信仰者でユダヤ人の指導者であるニコデモが主イエスを訪ねてきます。福音書記者はニコデモが“夜”にやってきた・・とわざわざ記しています。

この事については古来から様々に解釈されてきました。人々の想像力をかきたてるほど“夜”というのは不思議な時なのでしょう。先ほど交読文で読み交わした詩篇１９編の新共同訳にはこうあります。「天は神の栄光を物語り、大空は御手の業を示す。昼は昼に語り伝え、夜は夜に知識を送る」。だからでしょうか。ニコデモに好意的な人々は次のように言います。昼は働く時間。それぞれ、心の内に葛藤や苦しみ、課題、疑問を様々に抱えながらも、与えられた務めにいそしむ。そして、昼間の喧騒が嘘のように静まり、夜の闇に抱かれて世界が眠りに入るその時、人は神の御言葉に集中し、自分の問いの答えを探し、律法の教師のもとを訪ねて語り合う。夜の闇の深さは神の底知れぬ深み、神秘を表すようでもあります。夜の静寂（しじま）の中、深く神への思いに沈む時間、それが私たちに深い安息をもたらします。

一方、 ニコデモが夜、イエスさまのもとに来た事を否定的に捉える人たちもいます。ヨハネ福音書で“夜”という単語が印象的なのはなんといってもイスカリオテのユダが主イエスを裏切る時の描写です。主イエスは最後の晩餐で「わたしが浸すパンを取るものがわたしを裏切る」と仰ったあとにユダにパンを手渡します。ユダはそれを受け取って主イエスのみ前を去り、主を逮捕させる為大祭司たちの元に行きます。その時の様子を福音書記者はこう描きます。“ユダは主イエスからパン切れを受け取ると、すぐ出て行った。**夜**であった。”　わざわざ“夜”であった・・と付け加えるのです。光の主のもとを離れて滅びの道を一歩踏み出したユダ。彼を包む罪の闇が「夜」の一言に凝縮しています。ですから、夜、主を訪ねたニコデモもまた罪の闇夜の中にいた・・という人々もいます。

おそらく、これら両方はどちらも本当なのでしょう。ニコデモは地位も名誉もある自分が正式な教師でないイエスさまのもとを昼間堂々

と訪ねる事はできず、夜の闇に隠れるように訪ねた。ニコデモの迷いが現れています。彼はまだ自分を捨て去る事はできていなかったのです。

しかし、それでも彼は訪ねた。エルサレムであのような不思議な業をなさる主イエスを見て、『神はこの人と共にいてくださる』と確信し、自分の心を重くとらえて離さない疑問を主イエスに解決してもらいたかったのでしょう。ニコデモは主イエスのもとへと夜の闇の中、急いだのです。

5　神の支配を慕うニコデモ

ニコデモは、先ず、“神のもとから来られた教師”、また“神が共におられる方”と呼んでほめたたえています。主イエスの奇蹟を目の前で見た時の興奮が蘇って来たのかもしれません。おどり上がるように主イエスに駆け寄って、ほめたたえるニコデモの姿が目に浮かぶようです。

しかし、主イエスはニコデモの熱狂的な態度に水を差すように、意外な事をおっしゃいます。3 節です。「はっきり言っておく。人は新たに生まれなければ、神の国を見ることができない」。ニコデモは主になんの質問もしていません。それなのに、主は、いかにも「神の国を見るためにはどうしたらよいですか」とニコデモが質問されたかのように答えるのです。何故でしょうか。

２：２５に「主イエスは何が人間の心の中にあるかをよく知っておられた」とあるとおりなのです。主イエスにはニコデモの心の中に、「神の国はいつやってくるか」という疑問がある事をよくよくご存知でした。“神の国”とは、天地万物を創られた神の力がはっきりと目に見えて人々を支配している所。ですから、“神の国”は“神の支配”と読み替える事ができます。

当時、ユダヤ人は独立国家を失い、異教の民―ローマ帝国に支配される植民地状態が続いていました。そんな中、自分たちの父祖の神を捨てて支配者ローマ帝国の神々の偶像を造り、崇めて供え物をする人達が出てきます。ローマ帝国の神々を拝んだ方が何かと得だったからでしょう。また、弱い国の神の律法

など守っていてもしょうがない・・と、自分たちの民族のアイデンティティとも言える律法を捨て去る人も出てきました。“自分達を取り囲む現実の中には、力強い神の支配は全く見あたらない、一体いつになったら、自分たちを導いてくださる神の力が現れ、神の支配する国が出現するのか”・・それが、真面目に律法を守るニコデモにとっては最大の気がかりだったのでしょう。「是非あのお方の意見を聞きたい！」と主イエスの所にやってきました。

　この「神の国はどこにあるのか」という疑問はニコデモだけのものではありません。現代に生きる私たちクリスチャンの疑問でもあります。人生の不条理、説明がつかない不幸に直面した時、私たちが挙げる呻きにも似た思い、「こんな苦しみに遭おうとは。神は一体どこにおられるのか」私たちは皆、このような体験をします。苦しければ苦しいほど、そのような思いを抱きます。ですから、ここでもニコデモは私たちの代表だと言えるのです。

6　ニコデモの特徴

ここまでのニコデモー新たに生まれていない人の特徴をあげてみます。先ず、熱心に神の律法を守り信仰深く生活し、罪に満ち溢れたこの世界が神の支配のもとに入る事を熱望している。そして主イエスの御業を知りこの人は神が共におられる方だと感じた。それで夜、密かに主を訪ねた。こうして見てまいりますと、彼がまさに私たちクリスチャンの典型のように思えてきます。

7　新たに生まれる

　主イエスは、そんなニコデモに“霊によって新しく生まれる”事を３節と５節で語っています。３節の「誰も新たに生まれなければ神の国を見ることはできない」の「新たに」と訳されている単語は、「新たに」と「上から」両方の意味を持っていると言えます。だから、「上から新たに生まれなければ」と訳してもよい所です。しかし主イエスの答えが意外だったからでしょう。理解できないニコデモ。「母親の胎に戻ってまた出てくる事ができるのか？」と珍妙な質問を

するほど混乱しています。そんなニコデモに対して主イエスは３節の「新たに生まれなければ」という言葉を言い直します。５節です。「霊と水によらなければ神の国に入ることはできない」。ですから、３節と５節をあわせて主はこのように仰っているのです。「人は水と上からの霊によって新たに生まれなければ、神の支配に入ることはできない」。

「水と上からの霊によって新たに生まれる」とはどういう事でしょうか。「水」というのは、たらいの中の水ではありません。押し寄せる水、洪水のことです。旧約聖書では神の審きを意味します。ノアの方舟がその代表例です。ですから、「水」とは神の裁きにあって罪ある人間が滅び去る事です。一方、霊とは、そのように滅びるしかない罪深い人間を赦す愛なる神のみ霊です。神の御霊は、徹底的に裁かれ滅ぼされた人間に、新たに神の子として命を与えるのであります。神の霊によって新たに生まれる・・とは、いったん罪ある自分に完全に死んで、神の御霊によって新たな命を与えられる事を意味するのです。

8　主の証を受け入れる

では、新たに生まれ変わる為に人間は何をすればいいのでしょうか。それが１１節以降です。１１節以降で、主はニコデモに代表される私たち人間が「主イエスの証を受け入れない」から新たに生まれ変われないのだ・・と仰っています。これを逆に読めば、主イエスの証を受け入れたら、上からの霊によって新たにされる・・となります。

では、どのような証を受け入れれば、上からの霊によって新たな命が与えられるのでしょうか？１３節以降です。「天から降ってきた者、すなわち人の子の他には、天に上った者は誰もいない。そして、モーセが荒れ野で蛇を挙げたように、人の子も挙げられねばならない。それは信じる者が皆、人の子によって永遠の命を得る為である」これが、あなた方人間を新たに生まれ変わらせる私の証であり、あなた方を新たに創り変える力を持つのだ！・・そのように主は仰っているのです。

「モーセが荒れ野で蛇を上げた」物語は、民数記２１章の先ほどご一緒に聴いた箇所です。イスラエルの民が罪を犯した時、神から遣わされてきた蛇が人々を噛みました。人々は耐え切れず自分の罪を認め、悔い改めた。モーセが彼らのために神に赦しを願った時、神はその蛇を旗竿の先に掲げて人々に見せるようにと、モーセにお命じになりました。モーセは神が命じられたように青銅で蛇をつくりそれを掲げます。民にとって青銅の蛇は自分たちが神に逆らった罪の審きのシンボルです。滅びの徴でありました。しかし、不思議な事に、神に立ち帰り悔い改めた者がその審きの徴を仰ぎ見ると、滅びの徴の蛇が却って命をもたらすものとなったのです。

主イエスは、この蛇の姿にご自分の姿を託しておられます。天から降って来た神の御子は、人々の罪の為にただお一人神に裁かれ有罪判決を受け、徹底的に滅びさる苦しみの十字架の上に挙げられたのです。十字架の主イエスのお姿こそ、私たちの罪の徴でした。しかし、私たちがその十字架の主イエスを仰ぎ見て、神に立ち帰り、自分の罪を告白し神に赦しをこう時、思いもかけぬ事ですが、私たちは新たな命を得るのです。

9　悔い改めた者

ここでハンセン病患者への伝道に一生を捧げた大日向(おおひなた)繁牧師という方の証から、霊によって新しくされた者の姿を見ていきたいと思います。大日向先生はご自身、ハンセン病の患者でした。敗戦によって自分を支えていたものが崩れ去り病も深まり悩み苦しんでいた日々、ヨハネ福音書の第９章を知りました。そして、「自分の病いも悩みも苦しみも神の栄光が現れるためだった」と示され、信仰が与えられたそうです。

しかし・・と先生はこう続けます。「私はまだ主イエスの事が全然わかっていなかった。ニコデモのレベルに留まっていた」。それは一体どういう事なのでしょうか？

先生はおっしゃいます。「わたしは悩みの中で、結局、“わたしのためのキリスト”しか探していなかったのだ」と。その事がよくよく分かったのは、随分時が

経ってからだそうです。先生はこのように語られています。「わたしのために、主よ、お救いください・・とか、病気を治してください・・とか必死で祈る。それ自体は決して悪い事ではない。だけど、それだけでは信仰にはなっていない。大切なのは、本当のキリストの愛そのものにぶっつかる時だ。キリストの愛そのものにぶっつかる時、“わたしのためのキリスト”などともう言ってはいられない。“キリストのための私”でしかなくなる。わたしが消えてキリストしか見えなくなるのだ」。

先生は更に証されます。「そうなると神さまが寝てなさい・・と言うならば何年でも寝られる。神さまが立てというならばいつでも、はい、僕はここにいます、と言って立ち上がる。すべてが愛の主の御手の中にある。すべてを主に任せておればよい。こんなに楽しい人生はない」

10　霊によって新たにされる時

大日向先生の証を聴いてきました。一体私たちはどのような道を辿って新しく生まれ変わるのでしょうか。それは私たちにはわかりません。8節です。「風は思いのままに吹く。あなたはその名を聞いても、それがどこから来て、どこへ行くかを知らない。霊から生まれた者も皆そのとおりである」風という単語は霊という意味がある・・と先週お話しました。神の霊は自由に吹き来たり、また去っていくのです。人間がコントロールできるものではありません。

しかし、霊によって新しくされる時の特徴があります。私たち人間の内には、自分に死ぬ事に頑強に抵抗する古い自分がいます。ニコデモも悔い改める事を主イエスに求められていると気づいて、うろたえて「そんな事がありえましょうか」と虚しく反論してしまいます。だから、新しくされる時にも共通点があるのです。

かつてイスラエルの民がモーセの蛇をじっと仰ぎ見たように、私たちも十字架の主イエス・キリストをじっと仰ぎ見る。罪なき御子が私の代わりにその身に有罪宣告を受け、神の徹底的な怒りの審きに苦しむ姿。そのお姿を仰ぎ見つめ続けると、不思議な事ですが、自分の真の姿が見えてきます。主イエスから

見た自分の姿です。十字架の主の愛に背を向けて頑なに古い自分にしがみつく惨めな姿、不自由な姿です。主はそんな私の惨めさ、不自由さをご自分の体が痛むほどに「かわいそうに」と呻きをもって憐れんでくださる。その時がキリストの愛そのものとぶっつかる時です。十字架からキリストの愛がほとばしり出て、古い私に押し寄せ、押し流してくださる時。もう「自分のためのキリスト」なんて言っておれなくなり、「キリストのための自分」が現れ出てくる。自分の主張を繰り返す声は止み、十字架と復活の主イエス・キリストのみ声だけが聞こえてくる。その時こそ、主イエスの愛によって悔い改めた時、霊によって新しくされた時と言えます。今日の主イエスとニコデモの会話でも、途中からニコデモは発言しなくなります。ただ十字架の恵みを語る主イエスのお姿のみに焦点があたり、そのみ声のみが響いています。そして福音中の福音とまでいわれる３章１６節でクライマックスを迎えるのです。「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。」

11 霊によって新たにされた者

そして霊によって新たにされた者は、キリストのものです。パウロも「私たちは生きるにしろ死ぬにしろ、私たちは主イエス・キリストのもの」と告白し、「もはや我生くるにあらず、キリスト我が内にありていくるなり」と高らかに宣言しています。

霊によって新たに生まれるとは、キリストの者になるという事です。それは自由にされるという事。私たちが霊によって新しくされた時、キリストの者となり、どこまでも広く大きな神の世界を吹き抜けるみ霊の自由な命を生きる事ができます。神の子の自由です。もう自分の命は自分のものではなく、主イエス・キリストの内にある命―全てを主に委ねた自由な命なのです。

神の支配のもとに生きる喜びに満ち溢れた命です。

12　ニコデモの、私たちのその後

　果たしてニコデモが悔い改めて主イエスの弟子になったかどうか、聖書は何も語っていません。しかし、福音書記者ヨハネは、このあと、ニコデモを二回登場させます。７章、ニコデモは主イエスを逮捕しようと躍起になる祭司長やファリサイ派の人々に対して律法に基づいて主イエスを弁護します。そして１９章。十字架のあと主イエスのご遺体を墓に埋葬する時、ニコデモは大量の没薬と沈香を持参して主を葬ります。主の十字架から６０年以上経ったヨハネの教会でニコデモははっきりと人々の記憶に残っていたのです。

　神は、新たに霊から生まれさせた者を、時間をかけて神ご自身が育んでくださいます。ニコデモもまた主イエスを知る事によって霊によって新たに生まれかわり、霊の人として成長したのではないでしょうか。

　私たちも主イエスだけを見上げ、主の十字架から押し寄せるキリストの愛に包まれて、霊から新たに生まれた者としての歩みを続けていけます。日々新たにつくりかえられ、成長していきます。そして、新しく自由なキリストの命に生きる喜びを知らない方々にイエス・キリストの福音を宣べ伝える者とされます。新しい命をお与えくださる神に深く感謝いたしましょう。